

## 1. 研究背景と目的

2008年度告示の学習指導要領より、中学校1,2年生の保健体育科でダンス領域が必修化された。これによって得手不得手にかかわらず誰もがダンスを経験することとなったが、ダンスにネガティブなイメージを持つ生徒(猪崎ら, 2013)や、抵抗感を抱く中学校教員(酒向ら, 2014)も少なくない。そこで、あらゆる人にとって意義のあるダンス授業を目指すために、本研究では文献調査をもとに、学校体育におけるダンス授業の在り方を探ることとした。まずは竹内敏晴の論より「からだ」の教育として学校体育を捉え直し、田中泯の思想からダンスの原初的なコミュニケーションとしての役割を考察する。そして、竹内敏晴と野口三千三の思想からダンスの日常的なコミュニケーションとしての役割に注目し、中学校におけるダンス授業の在り方を検討する。

## 2. 「からだ」を育てるための学校体育の在り方

学校体育において、竹内(1975)は運動が得意な子どもは伸びるが、そうではない子にとってはコンプレックスを助長する場にしかならないため、体育を「からだそだて」と読み、「子どもの(先生も)からだ(と心)をいきいきとさせるための配慮とか方法のすべてを含めて体育と言いたい」と述べている。このようにあらゆる人にとって意義のある体育を目指すためには、スポーツを行ってより高く、より速く、より強く、を競うのではなく、個々の「からだ」に焦点を当てながら「からだ」の教育を行うことが必要であると言える。

## 3. 原初的なコミュニケーションとしてのダンス

「からだ」の教育を体育のダンス授業で行うために、文字や言葉が生まれる前から人間が持っていた原初的なコミュニケーションというダンス本来の役割に注目する。田中(2017)は「踊りの発生は言葉を変換する装置をまだ人間が持っていなかった時代のもの」と述べている。更に現代のコミュニケーションにおいても、身体から発散されているものが他者のそれとぶつかり合いながら生きているところに踊りがある(田中, 2011)と述べており、人と人がコミュニケーションを行っているときの微細な身体表現さえもダンスであると捉えることができる。これらより、得手不得手にかかわらず、すべての人にダンスが関係していると言えるだろう。

そのようなコミュニケーションでは、自己・他

者を理解する(あるいはしようとする)ことが重要であるが、そのためには人をまねて「身になる」ことが必要であると竹内(1999)は述べている。更に、まねるにあたっては正確さが欠かせず、思い込みの当てずっぽうでは理解に繋がらない。正確にまねるためには、自らの慣習や偏見を捨て去った「からだ」が必要であるという。また、コミュニケーション方法の一つである「ことば」と身体の関係について、野口(1972, 1996)は「からだの動きはもともとことばにつける付録ではなく、動きもことばそれ自体なのである。(中略)すべてのことばは必ずからだの動きを内に含み」と述べている。つまり、他者を理解するために、ことばと共にある身体の内外の微細な変化に対して意識的になる必要があるといえる。そのためには、原初的なコミュニケーションとしてのダンスを通して自他の表現を見つめ直す経験が求められる。

## 4. 中学校のダンス授業におけるダンスの在り方

実際のダンス授業では、ビデオを見て振付を覚える授業が多いことが報告され、そのような授業では一斉指導に終始している可能性が示唆されている(寺山ら, 2021)。その一方で、ダンスはゴールフリーな領域であるとの認識が広まる中で、そこにダンスの難しさを感じる教員もいるという(酒向ら, 2016)。それらの課題解決に向けて、筆者は以下のように提案する。本研究で注目してきた内容はダンスの基礎となる部分であるため、授業においては導入部分で原初的なコミュニケーションや「身になる」内容を行うことが望ましいだろう。例えば、日常生活におけるコミュニケーションの中にどのような身体表現があるのか、動きを創作したり表現する前に「表現してしまっているもの」を見つけ出す活動を導入として行うという内容が考えられる。ダンスを苦手・不得意と感じる人にとって、自由に表現することはハードルが高いかもかもしれない。しかし、既にあるものに目を向ければ身体表現に馴染みやよくなるだろう。そのように見つけ出した動きや表現を、デフォルメして創作ダンスに繋げたり、フォークダンスの動きはどのような身体表現をデフォルメしたのかを想像したりと、学びを拡げることできる。

このように、ダンスの原初的なコミュニケーションという側面に着目しながら少しでもダンスへの抵抗感を減少させることができれば、授業で踊った経験が日常のコミュニケーションを向上させたり、自他の身体表現に気づくことができるようになり、「からだ」を育てられるだろう。日常的な身体表現と向き合って思考する学びを、少しでも取り入れたダンス授業が求められると筆者は考える。